



玉子王子 著

序章

空っぽの部屋。

貧乏人が痩せていたのは過去の事、むしろ貧乏人ほどジャンクフードと運動不足で太るものだとわかれて久しい。

貧乏人の部屋がゴミだらけというのもはや過去のことになりつつあるだろう、余計なものを買う金がない貧乏人は、スマホだけは何とかもって、あらゆる欲求や娯楽をそれですまし、もはや部屋にテレビの一つもない。

貧乏人の部屋といわれて、エロ雑誌が積まれているのを想像するのはネットが発達する以前に成人したオッサン……というよりもはや老年層だろう。

若者はなんでもネットで済まして雑誌など読まない。

空っぽの部屋の主は石川大助。四〇歳童貞。フリーター。

仕事に出かける。

駅の前に高校生ぐらいの女の子が立っていて、募金を募っていた。

「難民を助けるために募金お願いします」

「それじゃ……」

千円入れる。結構な額だが、テレビで困っている難民を見たばかりだった、つい入れてしまう。

仕事を終え、帰る。

駅の近くで、話し声が聞こえた。

「千円入れた奴いたな、貧乏そうだった！」

主催者なのか何なのか、男。募金箱を持った女の前で笑っていた。

「難民もくそもねえだろあんな貧乏人。自分のほうが悲惨じゃねえか。難民とか入ってきたら真っ先に仕事奪われる奴だろうに、まあ頭悪いから仕方ねえな」

さも楽し気に女に笑いかける。

吊られるように笑う女。男が腰をへこっと超高速で引く。

「はふおおお、ちょ、何をオオ」

意味不明の光景。しかし今の男の動きと、股間を押さえるのを見れば男なら何が起きたか瞬時に理解する。

膝を締める大助。

——今、玉！？ 蹴った？ いきなり！？

急所痛に悶える男。腰を思い切り引いているので頭の位置が下がる。

それを見下ろしながら、唾を飛ばす女。

先ほどの笑いは油断を誘うための演技だったようだ。目が吊り上がっている。

「最低だよあんた！ こんな募金してる人間が、難民に同情する人を笑うなんて！」

もう一人が唾を吐く。

「それな。やめさしてもらおうわ。っていうか、オッサン男の大事なところぐらい守ろうよ、キ・〇・

タ・マ」

腰を引いて股間を押さえ、「急所痛に耐える」以外に何一つできなくなっている男。

女がペシペシとその頬を叩く。

離れたところで見えていた大助が電信柱の陰に隠れる。

——おいおい、いきなり金的って……そりゃ最低の野郎だけど……俺もむかついたけど、でも、やっぱ女は怖いわ。自分に玉がないから、どのぐらいのダメージかわからねえんだな。今はナノテクが発達して、玉ぐらいすぐ治るから女はマジで気軽に蹴って来やがる。いや、俺はそんな知り合いもないけど……

「ふんぐうう」

腰を引き、グネグネと尻を振る募金男。

ぷっと噴き出す女二人。

「見てみて、ケツ振ってる。金ちゃんやられた男って、みんなケツ振るよね」

「な……」

顔を赤らめる男。金的後の本能的な振る舞いを女に見下されて嘲笑される状況に眩暈がする、金的による眩暈と合わさって強い眩暈になる。

それでも、腰を振るのはやめられない。

「ぎゃははは！ 笑われて真っ赤な顔してるのに、ケツ振るのはやめないんだ」

「誘ってんの？ 誘ってんの？ ケツマ○コで誘ってんの？」

「それじゃもう一回膝金して邪魔なもん潰しときましようか。プチっとプチっと、金の玉」

「ふぐうう、お、お前ら、こんなことして……あ」

「おーっと、脅し来ました」

「男らしーい！ 女ごときに負けてたまるか！ っつかあ」

背後に回る女、羽交い絞めにして股間を守る手を引きはがす。

金的による眩暈と吐き気で汗だくの男が、頬を引きつらせつつ愛想笑いを浮かべる。

「あ、ちょ、勘弁……勘弁してくださいよー！」

「はははは、タ○キン狙うと男って素直になるよねー」

「睾丸蹴られるのよっぽど嫌なんだねーコーガン、コ・ウ・ガ・ン。おキ○タマ」

ペシペシと股間を叩く、触る程度のつもりなのに、相手が声を上げて腰を引くのを見てまた噴き出す女。

「あうっ！ はひっ！ やめ、玉……」

「あらら、ごめんなさいねー、ここ、キューショなんだよねー」

「今のぺちぺちで苦しいとかもうタ○キン抜いたほうがいいって、こんな弱点ぶら下げて暮らすのは不安でしょ？ ぶーらぶらあー、金の玉あー。キ○タマ取れば……安心して暮らせるじゃん」

「っていうかこいつチ○ポ小せえよ。金的蹴られて縮んでるにしても、これはないっしょ」

ぎゅ、ぎゅ、と股間の肉を握り、揉んで確かめる女。

「あお、ちょ、そんな……」

真っ赤になる男。

羽交い絞めの女が笑う。

「あは、イキってる奴って大抵粗チンだよねー」

「この前強引に口説いてきた奴なんて〇センチ位しかなかったよ」

「ぎゃははは！ 私が男ならもう死ぬしかないわそれ」

大助の頬が引きつる。

彼のモノはその「粗チン」よりさらに落ちるのだ。

直接自分に対する言葉ではないが、それだけにある種の「本音」として突き刺さる。

彼女らの急所攻撃にキュンキュンに縮んでいた股間がさらに縮む。

うなだれて家路につく。

その途中で、コンビニに寄ることにする。

毎週買っている漫画雑誌があるのだ。

最近また、面白い新人が出てきた。

新人はもう誰でも、自分より年下である。

それも気にならなくなってきた——まあ別に漫画も何も描いたことはないのもそもそも関係ないが。

コンビニ。

その前に広がる道。

その左右に、子供と夫婦が分かれていた。

危険な状況である。

親のほうに行こうと、子供が走って車に轢かれた話は無数にある。

と、子供が走り出す。トラックの前に。

その子供の親に大助は見覚えがあった。

見覚えどころではない、忘れもしない、中学時代彼をいじめていた男だった。

その男に気づき、子供連れなのを見て不公平さに怒りを感じていた。

それでも、つい大助は走り出してしまう。

子供を突き飛ばし、何とか自分もトラックをよけようとするが、避けきれず跳ね飛ばされる。



道路に叩きつけられた時、頭に衝撃を感じた。

これは助からないと直感する。

真っ青で駆け寄るかつての被害者。

いじめなどなければ、もっとちゃんと人付き合い出来、大助の人生もましなものだったかもしれない——別にフリーターなのはいいが、彼女どころか友人ゼロというのはあまり「まし」な人生とは言えないだろう。

そう考えれば、「かつて」ではなく、人生全体への加害者といえるかもしれない。

その加害者が、大助を抱き起す。

「大丈夫ですか！？ ありがとうございます！」

泣きながら叫ぶ。

「赤の他人のためにこんなことをしてくれるなんて……今時そんな人が」

薄れゆく意識の中で、泣いている加害者を見て大助は愕然とする。

相手は全然、自分のことなど覚えていない。

——うわ、この顔マジで俺を赤の他人とってるな……俺の葬式にでたら「中学の同級生だったのか」って驚いて……それで、「数奇な運命」に驚きつつ、たぶんいじめてたことなんて思い出さないんじゃないか？ ああ、これが「やったほうは忘れるの法則」か……

いじめの被害者で一人身の人間が、加害者の子供を助けて死んだ。

そんな何とも言えない不条理な出来事の方の当事者になったなど、たぶん気づきもしない。

——必要以上に感謝したり、後悔したり、ショック受けてほしいわけでもないが、気づかないって

のはなんだかなあ……でも子供が助かってよかったな……

親元を離れてからは、「豊か」とか「幸せ」とかと全く無縁だった男。

にもかかわらず、難民などに同情して寄付する男。

これから死ぬだろうと感じつつも、他人のことで喜べる男。

石川大助は最後の瞬間まで底なしの善人だった。

そういう人間だから現代の社会に適応できなかったのかもしれない。

そう誰かが憐れんだからでもないだろうが、彼の魂は異世界に転生する。

そして……

一章 彼女にフラれる転生者、理由は「チ○ポ小さいから」

腕が羽になっているドラゴン、ワイバーンが空を行く。

見上げる村人の女たち、驚くが、それほどではない。

ワイバーンは人間よりはるかに強いとはいえ、わざわざ何百人も人がいる場所に突っ込んで餌をあさる必要などない。怪我などしてはつまらないことだ。広範囲を飛んで偵察し、放牧されている羊でうまく取れれば安全でいい。数人程度の牧童など相手にならないのだし。

そういうことを村の主婦たちが知っているわけでもないが、ワイバーンが村を襲った話など聞いたことがない。常識的に、ワイバーンは村人には脅威ではないことはわかる。

村の家畜といえば農耕用の馬や食べるための豚程度で、それらは放牧はしないのでワイバーンに取られることもないし。

「ほら、竜だよ、竜」

「しっぽが二本。一本は竜のしっぽ、もう一本は**肉のしっぽ**。あは、オスね」

「結構ご立派なのかな？ ワイバーンの平均わからないからどうも……」

「タマタマも見えるよ、結構距離あるのに……デッカイねえ」

「うちの旦那もあのぐらいありゃねえ」

「っていうか、トカゲとかは玉竿体の中なんでしょ？ なんて竜は」

「知らないの？ 魔物は魔力があるからね、タマタマを体の中に入れてくとうまくいかないらしいよ、いろいろ」

「それで弱点丸出し形態かー、私ら人間にはありがたいわね、急所つけるし」

「でも、私ら人間の半分も丸出し形態じゃん」

「急所つけて私ら女の子様にはありがたいよね」

透き通った石の柱の周りでたむろする村の女たち。

聖石柱と呼ばれる、魔力を帯びた石だ。

村の中心部にある。

というか、村はまず聖石柱が立てられ、そこから広がっていくものだ。

と、聖石柱が光を放つ。

「あ」

「来た来た！」

「さー、今日はどっちかなあ」

「これだと面白いんだけどね」

女の一人が膝を曲げて股間を無防備にする。その股間の前で両手で一つずつリングを作り、あてがう。

「ぎゃはは、キ○タマポーズ！」

「ついてらっしゃる人ならいいんだけど」

唾を飛ばし笑いあう主婦たち。

その前に一組の男女が姿を現す。

唐突に、聖石柱の前にパッと現れたのだ。

目を瞑り、棒立ち。

男は全裸、女は下着の上に簡素なシャツを着ている。裾は太腿までだ。

この世界で死んだ上位生物は復活する。

聖石柱か魔石柱かの違いはあるが、上位生物はみな生き返る。

というか「死んでも復活する生物」を上位生物と呼んでいるのだが。

復活するが、それは基本身一つだ。女は下着とシャツの最低限の格好。

男は全裸。

この世界が始まってからずっとそうである。なぜなのか、などと考える人間はいない。

今復活した男、大助は異世界から転生してきた男なので不思議に思うが、この世界に元からいる人間たちはそれが普通なので特になんとも思っていない。そういうものだと受け入れるだけだ。

主婦たちが、世界のシステムによって全裸で棒立ちの大助の周りに集まる。

「おー」

「当りだわ」

「イケメンねー、当り当り」

「いや、モノには外れっしょ」

顔を赤らめつつ、復活直後で意識がない男の下半身を見る。

「みてみて」

「やだ、イケメンなのにチ○ポはしょぼーい」

「でもかっこいい」

「ぷっ、包茎」

「立ったら剥けるのかもよ」

「見栄剥きしといたろ。哀れすぎる」



経験豊富な熟女が小ぶりな一物を摘まみ、グイと皮をむく。

「ヤダ、先っぽしょぼ」

「すべてしょぼいわ」

「顔だけクソチ○ポ」

「こんな粗チンでもイケメンなら彼女ができるのね」

「彼女とは限らないけど……彼女なら幸せでしょうね、こんなイケメンと付き合えて。夜以外は」
一物談議に花を咲かせる。

聖石柱の根元を掘ると湧水が出る、女たちはそれを使って家事をやっている、大義名分としてはそれだが、男の復活者が出るとじつくりと全員が股間を凝視するのは言うまでもない。

女が目を開ける。

「あ、どうも」

「あ、どうも」

「えーっと、この村は」

「ここはバテアの村です」

「ザ・村人！」

笑いあう女たち。

チラチラと、男の股間と顔を交互に見る。

大助は、薄目を開けていた。

復活してしばらくすれば意識は戻る。

——くっそ、この女ども……俺のチ○ポはそんなに小さくない。今までの女で、小さいって言った女一人もいなかったし！ 「あ、チン○ンちいさ……何でもない」 っていうよくわからない発言は**毎回飛び出した**けど、はっきり小さいとは言われたことねえ！ でもそんなこと言ってもこいつら、多分信じないだろうし。信じないというか「それ、ほぼほぼ小さいって言われてんじゃん！」とか意味不明なこと言うだろう……くそ、動けない。こんな、自分のチ○ポが女に小さいって笑いものにされてる中、動けるわけねえ。恥ずかしすぎる……誤解とは言え、恥ずかしすぎる。俺のチ○ポが小さいというのは誤解とはいえ……どうすれば……畜生、復活のたびにどこ行ってもこれだよ。チ○コ小さくてお前らに迷惑かけたか！？ 腐れマ○コども……

自分をごまかしつつ、ごまかしきれない中途半端な事を考えつつ気絶した振り。

とはいえ聞こえている物は聞こえている、顔は赤らみ、股間はさらに縮む。

そうなれな目ざとい女たちが気づかないわけがない。

「ちょっと、また包茎に、縮んで包茎に」

「しっ」

「さらに極小化」

「持つものはさらにでっかく、持たざる者はさらに小さく……世知辛い世の中ですわ」

クスクス笑い、肘で突き合いつつも「あんた起きてるでしょ！」とまでは残酷になれない女たち。

そんな中で、同じく気づいた女が、相棒の男が動けないのを察して動き出した形だ。

女が話しかけてきたので、さすがに短小言葉責めを中止する主婦たち。

その間隙を縫って、やっと目を開けられる大助。

「あ、あー、やられたんだ。残念だったなー。今気が付いたよ」

顔を赤らめ、頬を引きつらせている男。

ニヤニヤ笑いつつ、主婦たちがそれに話しかける。

「あら、おはよう」

「イケメンねお兄さん」

「っていうか、本当に顔だけはすっごいかっこいいよね、顔だけは」

転生した体は若く、見栄えは驚くほどよかった。背は高いし顔は立っているだけで彼女ができるレベル。

それだけだともうほぼ他人になったようで自我が保てなかったかもしれない。

しかし股間だけは元のままだった。間違いなく自分のモノであるそれを見て「ああ、やっぱりこの体は自分の体だ」と確信し、自我を保つことができた。

そんなありがたい**極小一物**だが、女たちにとっては笑いの対象でしかない。

「顔だけって！ どういう含みがある発言なのかしらね」

「そりゃねえ」

ちらちらと股間を見つつ、やはりクスクス笑い。

と、一人が男の肩を叩く。

「武器や防具は持ってるだけじゃだめよ、装備しないと」

「してますけど」

「いやしてないじゃん！ 丸出し！」

「あ、「ひのきのぼう」装備してるってこと!？」

「いやいや、ひのきのつまようじでしょ」

「ちょ、そんな本人の前ではつきり！」

「つまようじじゃないよ！ ねえお兄さん。……そんなに長くないもんねー」



「ぎゃはははは！」

「でも、つまようじよりは太いよ！」

「そうそう、つまようじよりは太い！ お兄さんのおチン○んはつまようじよりは太い！」

真っ赤な顔で唇を噛む男。

——チ○コがつまようじより太いって全然ほめてねーんだよ！ むしろそんなもんと比べて嘲笑してやがるんだなこいつら……クソマ○コどもがああ、玉もない出来損ないの癖しやがって……

震える男。

その周りで、盛り上がる主婦たち。

「長さではアレだから、引き分けね」

「つまり、つまようじと同じ価値のチ○ポ」

「でも金ちゃんは結構立派よ」

「だからむしろ竿のしょぼさが引き立つというね」

「イケメン！ デカ金！ そしてつまようじ！」

「ぎゃははは！ 三段落ちじゃん！」

「ふぐうう」

——ミリア……ぼ、防御頼む……防御頼む！

相棒の冒険者を見る。

「ダイスケ……」

ため息をつく女。

男は石川大助と普通に本名を名乗っている。元々有名怪盗の相棒二人の名前を半分ずつ取ったような感じなので——苗字は偶然だが、名前は親がそのアニメの大ファンだったためだ。侍好きなので苗字が石川でなければ五右衛門という名前にしたと聞いたとき、大助は心から苗字が石川でよかったと思った——ファンタジー世界でもイケると思った……わけではなく、何も考えず本名を名乗っただけのことだ。

「やっぱり無理だわ、私たち」

「え？」

「毎回毎回、復活のたびに相棒が笑いものになると、こっちまでランク低いみたいに思われちゃうし……」

「おいおい待てよ！ いつも言ってるけど、実は俺はこの世界の人間ではなく、他所から転生してきた人間だから、これから大活躍……」

「その **クソ寒いよくわかんね一話** も飽きたっちゃったし……結局のところ、ダイスケって顔がいいだけなんだよね。でも、そんなクソチ○ポじゃねえ、顔がよくても意味なくね？」

「待て待て！ 転生前は結構……このぐらいはあったんだぞ？」

30センチ位の幅を示す大助。

転生前の彼のモノも今持っているものと寸分たがわないが——おかげで若く美しい、自分とつながりが無い体になっても自我が保てたわけだが——口先だけなら何とでもいえる。

それに、うんざりといった顔で頭を振るミリア。

「だから飽きたっつーの、その転生とかで、面白いことできるならともかく、マジで転生とかしてきた人間だとしても、あんただの底辺冒険者じゃん。それも極小チ○ポ。底辺負けチ○ポ。さっきもしょぼいダンジョンであっさり罠にかかって二人そろって死亡って……あんたといってもろくな未来なさそうだから、もうコンビ解散ってことで」

「で、でも喜んでくれたじゃん？」

「はあ？ こんな大勢の人の前でそんなこと言う？ っていうか、演技に決まってんじゃない。ヘタクソだし」

「が……」

「まー、この年ならそのぐらいかな？」

二人とも十七ぐらいに見える。

実際、ミリアのほうは十七である。

しかし大助のほうは転生前は四十歳だった。気づいたらこの世界に居たのが一年前であるから、四

十一歳といえなくもない。

が、前世では顔もしょぼく、童貞歴四十年の猛者だった。

テクニクなどあるわけもない。

「四十歳ぐらいであんたの技量じゃクソチ○ポにふさわしいクソテクニクだけど……」

「ふがっ……で、でも、経験なけりゃ何歳でも下手なのは多少はね？」

「テクあってもこれじゃねー、って話ではあるけどね」

「ぎゃはは、恋人同士の話なんだから黙って聞いてやろうよ！」

「まー、そういうわけだから、お別れね。さいなら」

「ま、まって……」

聖石柱は大きな岩に突き刺さっており、前には湧水を囲む泉。

これは洗濯などで汚しても汚れない特別な水だが……それはともかく、それらの施設を目隠しの塀が囲っている。

出口は四方の角と正面である。角は内側に板がL字に置かれている。

正面はその前に長い板があり、とにかく外から中が見えない形だ。

大体どこの聖石柱もこういう感じに目隠しされている。

はじめそれを見た大助はそれを当然だと思った。

何せ復活時の男は全裸であるから。

しかしどうも、そういう事ではなかった。

下着で現れる女が外から見えないようにする保護であるという。

——フルチン野郎はどうでもいいってか。

加えて、「家事」をやっている女たちが男の復活者と「偶然」出くわし、なんやかんやと話すところが外から見えないように……というか、見えなければ羽目も外せる、という意味もあるのだろうか、もちろん表立って言われることはない。

出口近くに小屋が置かれている。

近づいていく大助とミリア。

その後ろ姿を見て、クスクス笑う女たち。

「みてよ、きれいなお尻」

「引き締まってるねえ、お尻までイケメンねえ。イケ尻ねえ」

「っていうか、足の間からやっぱり何も見えないね」

「この前の人、後ろからでもブラブラくん見えてたよね」

「立派だったわー」

「しっ！ パンツ脱いだ状況で「立派」なんて言葉絶対聞くことがない人の前でそれは可哀そうよ！」

「気を使いすぎて逆に攻撃になってる気がするんだけど！」

小屋。

前に木箱が置かれている。

墨で文字が書かれている——紙が貴重なので張り紙などはなかなかされない——男性は箱の中身をご自由にお使いください。女性は小屋の中をお使いください。

小屋に入るミリア。

箱の中から、少しでもましな服を探しつつ、小屋の中に声をかける大助。

「ミリア、考え直してくれ！ 女は大ききなんて気にしないんだろ？」

「確かにそうなんだけど……限度があるってことはわかるわよね？ っていうか、あなたのチ○ポ、エッチ可能の限界に挑戦してるじゃん。ギリギリエッチ可能のチ○ポの業界内で最少目指してるじゃん。そういうの隠せる世界ならまだしもさー、私ら結構死にまくる仕事なわけだから「あの子のカレピッチ○ポ小さいよねー」とかマウント取られるのはマジ勘弁ってことっすよ」

はじめから下着とシャツを着ているミリアは、その上から粗末な服と靴をつけるぐらいすぐである。扉を開ける。

大助はまだパンツ姿だ。フルチンで復活し、外で服を着るという割と悲惨な展開。

その悲惨なパンツ男を見て、ミリアがため息をつく。

「あー、パンツはいてりゃイケメンだよなあ。っていうか、イケメンは女性ホルモン多いから短小多ってマジなのねえ……いや、今まで付き合ったイケメンは確かにみんな小さかったけど……でもイケメンに嫉妬してる奴が流してる噂なんじゃねーのって疑ってたのよね実際。でも、一番のイケメンが一番の極小なんだから、やっぱりガチなんだなあ」

「待ってくれ！ 俺は転生者だ！ **いずれ運命が動き出す！**」

「かー、わけわかんねえわ。具体的に何が起こるのよ？」

「チートでいろいろする！」

「チート以前に人脈ゼロ+ノースキル野郎でしょうが」

「何とかなる！ だって転生者だから！」

「っていうかつくづくその「転生者」ってわけわかんねーんですけど？」

歩き去ろうとするミリアを追いかける大助。

パンツ姿だが、気にしてられない。

正面から出ていく。

と、板壁と板壁の間の通路で外から入ってきた主婦たちと出会う。

「あらっ」

「あなた、復活者なんだ？」

「ちょっと……すごいイケメン」

「いやあ！ 損した！ もうちょっと早く来てさえいれば……」

チラ、と熱視線をパンツに送る主婦たち。

「あとちょっと早ければ」

「見れたのに、このイケメン君の……」

はあ、と熱い息を吐く主婦たち。

「モテモテじゃん。大丈夫、次の相棒もすぐ見つかるよ。何なら女の子のチームに入れてもらったら？ 代わりにチ○ポ入れちゃえばいいじゃん」

「え、あなたたち別れるの？」

「はい、だって……まあ、理由はともかく。それじゃ、ダイスケさいなら。もうマジでさいならね？」

「ま、待って……」

去ろうとするミリア。追いかける大助。

と、パンツは古い。ゴムがある世界ではない。

紐で縛るのだが、急いでいて緩かった。

それでも普通は男なら、ちょっとした引っかかりがあるのでスポンと落ちるものではない。落ちかかれれば子供でも引っかかって慌てて止めるものだ。

だが、なぜか不思議なことに大助のパンツはスポンと落ちる。

主婦たちが黄色い声を上げる。

「きゃああ！」

「ちょ、ラッキ！」

「目の保養……え！？」

「ちょっと、お兄さんどうしたの！？ 大事なモノないじゃない！」

「あ、待って奥さん……目立たないけど……ご立派なタマタマに埋もれるように小指」

「うっそ！ 超極小チ○ポじゃん！」

「これはもうその辺でフルチンで走り回ってるクソガキの中に入ってもチ○ポだけなら紛れ込めるレベルですなあ……」

「いやいや、さすがにバレるでしょ？ そんな子供の中に入れば目立つよ、……小ささで！」

「は一、なんなんこれ？」

「がっかりー」

「隠してりゃ夢持てたのに」

「あーあ、夢も希望もない、腐れおチ○ポ見ちゃったわ。極小包莖、極小包莖、皮のほうが中身よりありそうな**気合入ったクソ包莖**見ちゃったわ」

「イケメンはなんか知らんけど不思議に小さい奴多いけど……ここまでののはなかったわ」

「お兄さん、絶望しちゃだめよ？」

「それは「このサイズの持ち主は絶望しろ」って言ってるのと同じだから！」

「ぎゃははは！ だって絶望でしょこれは！」

憧れ、驚き、落胆、そして嘲笑。

目まぐるしく変わる主婦たちに、青ざめつつ頬を赤らめる大助。

眉を顰めるミリア。

「ほらあ、私まで一緒に笑われるんだよ？ 一緒にいたらさ。別れるしかねーっしょ、マジで！ 並みの短小ならまだ我慢できる顔だけどさあ、さすがにそれは我慢の限界でしょ？ でもまあ、女引っ掛けるのは余裕だろうし、チ○ポより顔にポイント付ける子なら我慢してくれるだろうから、これから頑張るね、粗チンなりに」

「いうわねー」

「我慢してたんでしょうね」

「男らしく諦めなさい、粗チンくん」

「そんなチ○ポで「男らしく」もないけどね」

「いや、金ちゃんは人並み以上なんだから」

「お姉さんたちの言う通り！ そんなじゃ、ガチさいなら」

「こ、この腐れマ○コ！」

決定的に切られた、それも女たちの前で、粗チンを理由に。

さらに、その粗チンが丸出しの状況で。

その上、さいならといいつつ、親指と人差し指の間をほとんど開けず、何かの大きさでも示すような手つきをミリアは見せた。

実際のモノはそれよりはあるが、まあそういう表現をされても当然の大きさだと周りの主婦たちがなんとなく納得の雰囲気を出したことで、ついに激昂する大助。

ミリアに組み付く。

「この……力づくで」

「へー、力づくで？ さっすが一、力で来るなんて、さすが……男の子っ！」

ペン。

平手で掠るように叩くミリア。

へこ、と腰を引く大助。

「はふっ、ちょ、そこ……」

「やだ、プルンって！」

「いきなり急所攻撃！ 戦闘訓練積んだ女は怖いわねー、お兄さん。男の一番弱いところ、集中攻撃してくるからねー。女の子は、男の子のアソコには手加減ないよー」

「っていうか今の攻撃ってレベル？」

「肩なら気づかないかもだけど」

「男の急所なら、別なんだろうね」

「見てよ、オラついた激昂顔がへつらい顔に変わっちゃった」

「み、ミリアまって……はふっ！ はほっ！」

ペンペンペンペン。

乳房ならばタプタプと愛撫する程度の衝撃。

それに対して、叩かれるたびに目を右、左、上、下と激しく動かし、口をしゃちほこのようにして叫ぶ。

「はぐっ！ おぶっ！ あがっ！ はひっ！」

「ぎゃははは！ ナイス反応！」

「大げさすぎるでしょ！」

「いやいや、確かに女の体なら、あの攻撃？ で、あの反応が出る場所はないわ。でも男の人にはね……男特有の、**肉袋臓物入り**だけは、その人体の常識を遥かに覆す撃たれ弱さだから」

「キャン玉袋の弱さはミラクル！」

「そらそらそらそら」

ペンペンペンペン。

遊びにしか見えない打撃。実際遊んでいる。

しかし、ダメージは本物である。

「はぐって、はぐっ、やめ、やめて……ちょおおお」

少しでも逃げようとつま先立ちになる、その締められた足の上に細い手を突っ込み、ペンペンと軽

く持ち上げるように肉玉を弾く。

「ぷっ、ほんとキンキン弱いわね。いくらあんたが底辺冒険者とはいえ、やっぱり男の人だから力じゃ私なんか敵うわけない水準だよ。でも密着状態でもキンキン狙えば負ける気しないわ、やっぱり男の人だからね」

「底辺底辺って……ミリアだって……はふっ！」

「はい去勢けってーい、ニギニギ、キ〇タマ握りー。見せてやるぜ？ 底辺女性冒険者による、おキ〇タマ握り潰しを！」



「ちょ、まつ」

ペン、と叩いてそのまま押し付けるように肉玉を握るミリア。

下から掴み、手首を半回転させて親指と人差し指で根元を掴む手慣れた握り方。

周りに集まっていた主婦たちが顔を赤らめ、唾を飛ばす。

「きゃー、握っちゃった握っちゃった！ 男の大事な金の玉がっしり！」

「女特有の遠慮のない玉握りね」

「男だと、自分も握られるという潜在的恐怖があるけど……私たち女の子様にはそんなもんないからね」

「金的・去勢の恐怖……男の人にとったら人生最大の恐怖でしょそれ？ 治るって言ってもさ、男にとってはたぶんそこそが最大のダメージを受ける場所だろうし」

死んでも生き返る世界であるから、当然怪我もすぐ治る。魔法などで治すこともできるが、それ以前に怪我は大体最長一日で完治してしまう。

しかしそれでも「去勢ぐらいどうでもいい」と考えられる男などいるわけもない。

「まって、もう諦めるから」

「あは、あの顔！」

「あんな必死で呼び止めてたのに、タマタマ握られた途端白旗！」

「女の子だけの必殺説得術、その名はキ〇タマ握り」

「生意気男は、キ〇タマ握って支配しろ」

「うちの子もあんまりうるさいとタマタマ握って「女の子にしちゃうよ」っていえば大人しくなるのよ。ちなみにその子のチン〇ン、彼のよりずっとご立派。五歳だけど」

「いやいや、あの子が巨根くんなのよ絶対！ 将来有望なのよ、絶対！」

「そして有望じゃない将来に到達してしまった極小チン〇ンくんがここでタマタマ潰しを食らってる」と

「格差社会ですわ」

笑いあいつつ、じっくりと大助の股間を見るのをやめない主婦たちの目はギラギラと輝き、頬は興奮に赤らんでいた。

それを感じつつ、押さえた声のミリア。

「それじゃ、潰すよ？ 潰すよ？ コーガン潰すよ？ 潰すよー、コーガン！」

「やめ、やめて……」

「想像して？ 何度もエッチした女の子があなたのおキ〇タマを握ってるの。おキ〇タマを握り潰そうとしてるの。理由はチ〇ポが小さくて満足できなかったから。男として終わっちゃってるよね、このシチュエーション」

「ひiiiiii！」

「そういう流れだっけ？ 悪口に反応して握ったような」

「でもその悪口が出たのも結局のところ短小だからで……」

「じゃあ、大まかにはその子が正しいのね」

「悲惨ねー、ペ〇スが小さいと！」

「ぎゃはは！」

笑ながら、ダイスケの耳の近くに口を寄せる主婦たち。

息を吹きかけるようにして囁く。

「ペ〇スが小さいペ〇スが小さいペ〇スが小さいペ〇スが小さい」

「短小野郎は去勢されろ短小野郎は去勢されろ短小野郎は去勢されろ短小野郎は去勢されろ」

「粗チンは金無しがお似合い粗チンは金無しがお似合い粗チンは金無しがお似合い」

「ひiiiiii」

催眠でもかけるように思い思いの嘲りを口にする主婦たち。

しかし結局は、根本に回帰する。

すなわち……

「ペ〇スが小さいペ〇スが小さいペ〇スが小さいペ〇スが小さい ペ〇スが小さいペ〇スが小さいペ〇スが小さいペ〇スが小さい ペ〇スが小さいペ〇スが小さい ペ〇スが小さいペ〇スが小さいペ〇スが小さいペ〇スが小さい ペ〇スが

小さいペ○スが小さいペ○スが小さいペ○スが小さい ペ○スが小さいペ○スが小さいペ○スが小さい
ペ○スが小さいペ○スが小さいペ○スが小さいペ○スが小さいペ○スが小さいペ○スが小さい ペ○スが小さいペ○ス
が小さいペ○スが小さいペ○スが小さい ペ○スが小さいペ○スが小さいペ○スが小さいペ○スが小さい
ペ○スが小さいペ○スが小さいペ○スが小さいペ○スが小さい ペ○スが小さいペ○スが小さいペ
○スが小さいペ○スが小さい

一人ほどの主婦たちに耳元でコンプレックスの根本を囁かれ、同時に元カノともいうべき女に睾丸を握り潰されていく。

あまりの状況に涎を垂らし、もはや何も考えられない大助。

「あふおおおおお」

「はいはいバグったふりしてもタ○キン潰しはやめませーん。みなさーん、もうすぐ彼の睾丸が潰れまーす」

「はいー！ それじゃ……もうすぐキ○タマ無しもうすぐキ○タマ無しもうすぐキ○タマ無しもうすぐキ○タマ無し
もうすぐキ○タマ無しもうすぐキ○タマ無しもうすぐキ○タマ無しもうすぐキ○タマ無しもうすぐキ○タマ無し
もうすぐキ○タマ無し」

「玉無しは男じゃない玉無しは男じゃない玉無しは男じゃない玉無しは男じゃない」

「男終了五秒前男終了五秒前男終了五秒前男終了五秒前男終了五秒前男終了五秒前男終了五秒前男終了五秒前男
終了五秒前男終了五秒前男終了五秒前男終了五秒前男終了五秒前男終了五秒前男終了五秒前」

「あうおおおお！ やめえええ潰さないでっ！」

泡を吹き、唾を飛ばす。腰をひねるが、逃げ場はない。

爆笑する女たち。

「きゃはは！ こーんな弱点ぶら下げて、力づくとかかますからだよ？ ほらほら潰れちゃえ、キ○タマ、キ○タマ、キー○タマ！」

「やっちゃえやっちゃえ！ キ○タマやっちゃえ！」

「急所を潰せ、急所を潰せ、男の急所をぶっ潰せ！」

「あぐ……ぐむうううううううううう！」

仰け反り、ピンと背を反らせる大助。

目を輝かせる女たち。

唾を飛ばして叫ぶミリア。

手の中の感触。先ほどまであった肉の塊が、形を失っていた。ぐちゅ、と急に抵抗を失い、形が崩れた。その瞬間、ギュッと雌穴が引き締まるのを感じたミリア。

涎を少し垂らしつつ、叫ぶ。

「潰れました！ 二個とも！ 金の玉！ ダブルでクラッシュです！」

「きゃー！」

「女の子誕生！」

「短小野郎は、ゾーモツ潰して女に変われ」

白目を剥き、崩れる大助。

その股間を開かせ、指さす。

「ほら、袋が空っぽ。残骸だけです」

「いやーん、ひさーん」

「弱い雄はキ○タマつけてる意味ないわよねー」

「ベータチ○ポにキ○タマはもったいないと」

「それじゃ、私はこの辺で」

「私らも……あ、そうだ、コレ、持ってる？」

懐から瓶を取り出す。

「玉再生薬」

「というか回復ポーションだけどね」

「男と喧嘩したら九割以上キ○タマ潰しちゃうから、女なら大体持ってるよね。というか簡単に治せるから潰せるという話」

「放っておいても治るけど、転がってられるのも邪魔だからね」

「すいません、復活したばかりなので……すいませんけど、この馬鹿に飲ませてやってもらえませんか？ まあ放っておいても治るので、無理にとは申しませんが……」

「いいのよ安いもんだし。それじゃ、ほらほら、ごっくんしようね」

「ごっくんしようねって！」

「やだ、この子の股間見てたら子供に対するような態度取っちゃう、なんでだろ？」

笑ながら、玉再生。

飲ませると、体が淡く光る。

再生を見届けると、今度こそミリアが去っていく。

主婦たちは立ち話。

「ほら、玉袋が」

「ポロッと、袋に玉が入る感じなんだよね、再生の時」

「そうそう、これがちょっと面白いんだ。って話して、彼氏に振られたことある」

「あるある。何回潰してんだよ！ ってひかれちゃってさー。そんなに潰してないっつうの」

「ってというか潰れやすいのが悪いんだよねえ。生殖器だよ？ 簡単に潰れんなよっての」

「まあそんなザコ玉ぶら下げてくれてるから、私らも「キーン！」の一手で男に勝利できるわけですが」

「それにしても、この人の小さいよねえ」

「マジではじめ見たときは付いてないんだと思ったよ」

「ってというかこれもう半分ぐらいついてないのと同じような」

見下ろし、笑い続ける女たち。

玉が治り、気づいても「気絶している自分への短小言葉責め大盛り上がり」の中では動けない大助。彼が気づいていることに気づいているが、主婦たちは黙っている。

もう立ち去る流れだったのに、これはこれで面白いからと、延々粗チン嘲笑を続けていた。

「これは入れたときに申告してもらわないと、お互いにとって不幸な誤解が生じかねないよねえ」

「入れましたー」

「え、嘘？ マジで入れてんの？」

「こらこら！ そこは信じるよ！」

爆笑の中、地面に横たわり、唇を噛む大助。

——ち、畜生……こいつら多分、俺が起きてるの気づいてやがる。でも、万一気づいてなかったら、

こんな雰囲気最悪の中立ち上がっていく根性は……

キュンキュンに、元から小さいモノを縮み上がらせつつ、寝続けるしかない大助。

体験版終わり

この後、大助を更なる短小責めと金的が待つ。

覗きと疑われて玉潰しされたり、豚の体に精神だけ宿り何度も去勢されたりと大忙し。

続きは製品版でぜひお楽しみください。